
異世界の後宮で勝ち組を目指す話

SS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の後宮で勝ち組を目指す話

【Nコード】

N4288Y

【作者名】

SS

【あらすじ】

異世界に転生トリップしたもと38歳OL、現侯爵家3女。ド派手な両親兄妹に比べて地味な容姿の主人公がラッキーにも裕福な貴族の家に生まれたので、現代知識はどうしても我慢できないところを改善する程度におさえ、のんびり趣味に生きる事を目標にがんばる話。

ぼちぼち更新。異世界転生もの好きがこうじて自分でも書いてみたくなりました。

超二ト的勝ち組の後宮での顧みられないその他大勢のお妃様を目指す話です。

主人公最強ではありませんが、主人公至上主義ですので、主人公が辛い目にあったりはあんまりしません。ドキドキハラハラバトル成分もありません。後宮とかが出てきたりしますが、恋愛色も強くないです。

基本ほのぼのというか淡々と進む話ですので、お暇な時にひまつぶし程度でお読み下さい。

警告タグのR15と残酷描写は一応つけていますが、そこまでのものはない予定です。

序章

前世、私は38歳アラフォーの独身OLだった。

そこそこに忙しくお給料もまあまあな会社の経理課に勤め、軽度のオタクで活字中毒気味、ネット小説を読むのと書くのが一番の趣味。自作小説を素人小説投稿サイトに何作かアップしたりもしていた。

その他の趣味はカラオケと旅行と映画鑑賞といういたって一般的なもの。履歴書の趣味欄にはいつもこちらのみを書いていた。乱読気味なのでネット小説以外の本も小説に限らず何でも読むから、読書をつけ加える事もあるが、最近は読書するっただけでオタクっぽいと思われる事もあるのだ。ゲームも少々するが、それも書かない。私はオープンオタクではなく隠れオタクだった。基本的にチキンなのだ。

周りの友達はほとんど結婚し、子供を産み、色々大変な事もあるけど幸せそうだ。

子供は比較的好きな方なのでそれも楽しそうだなと思うけど、昔から恋愛というものにとんと興味がなく、おつきあいというものをしてみたことはあるけれど、ピンとこず、のめりこむこともない私は大体短い期間で自然消滅という形で恋愛を終わらせた。

これは向いてないんだな、と何度目かで確信した。

30歳の頃には自分は多分結婚はしないだろうと漠然と感じ、マンションを買って猫を飼い老後資金をこつこつと貯金する日々。

周囲からは「結婚しないの?」「寂しくない?」などと聞かれるが、遊んでくれる友達も少数だがいないではないし、猫もいるし、一人で楽しめる趣味も持っている。たまに会う妹の子供を可愛がり、

おもちゃを賣ぐ。

そういう至って気楽な生活に満足していた。

途中で事故や病気にならなければ仕事を定年まで勤めあげ、その後は自由気ままに暮らし、いよいよ体がきかなくなれば老人ホームに入ろう。

そんな人生計画をたてていた、まあ普通の何の変哲もないそこらによくいるおばさんだったのです。

そしてこれまたさほどめずらしくもない話で、雨の夜、車のスリッパ事故に巻き込まれて死亡。

という前世。そう、前世なのです。

あ、死んだ。そう思っただけ痛のなか意識を失い、次に目が覚めて、あら？助かったの？と思った時には赤ちゃんになっていた。

最初、体が思うように動かず、目もよく見えなかったので、やべえ事故の後遺症か？治るのか？ずっと不自由なままだったらどうしよう？医療費と生活費と、しばらくは貯金があるけど…あ、事故だから保険おりる？医療費相手持ち？？と心の中で焦っていたら、巨大な人影が私を覗き込んできた。

「@、。 / ; ! % \$? 」

確実に日本語でない良くわからない言語で優しく何事かを話しかけられ、首の後ろとお尻の辺りに腕をまわされ、ひよいと抱き上げられた。

その人の胸に（女性でした）抱かれたままゆるりと揺らされるに至って、巨人に遭遇した驚きで硬直していた私はなんとなく悟り、体の力を抜いた。

これは、あれだ。輪廻転生ってやつだ。相手が巨人なんじゃなくて私が赤ちゃんなんだ。

転生ってホントにあったんだな…。

この理解の早さはオタクならではだつたらう。

ネット小説で今流行の転生ものは私も大好物で、自分もいわゆる「異世界転生トリップもの」に着手し20話ほど書き進めていたところだった。

そこそこ見てくれている人も増えてきていて書くのがとっても楽しかった。

そういえばそもそもあの視界の悪い豪雨の中、夜間に外出したのも、市民図書館で借りていたその小説のNAISEI部分用の資料が翌日返却日だったので、コンビニで必要部分をコピーする為だった。

せつかくこれからNAISEIパート突入！って色々勉強したのに、エタっちゃうのかあ…あ…

それにしても別に転生もの定番の神様とかには会わなかったけど…。てことは特殊能力とかTUEEEは無いな。残念！ま、普通の転生はあるかもだけど、神様チート転生はさすがに願望入った創作物だもんね。

でもこんな普通人間の私でも転生しちゃうなんて、案外転生してみんなしてるのかも。そして死んですぐの赤ちゃんな今はいろいろ覚えてるけど段々忘れていくのかも。

ここはどここの国かなあ。言葉は日本語でも英語でも私の知ってるヨーロッパあたりの言語でも中国や韓国のもなさそうだったけど、できれば紛争とかがある地域じゃなくて、貧困地域でもないところがいいなあ…。

あんまり苦労とかはしたくないよ。この人生ものんびりのほほんと生きていきたい…。

などと切実かつのんきなことを考えつつ、赤ちゃんの脳みそで複雑な事を考えたからなのか、推定母親に抱かれて本能的に安心したのか、揺れに負けたのか、だんだんとおりてくる瞼に逆らわず目を閉じた。

第一章 1話目 視界不鮮明（前書き）

お気に入り登録やポイント評価、ありがとうございます。

第一章 1話目 視界不鮮明

セラスティーア0歳です。まだはつきり目が見えません。

セラスティーアというのは今世での名前です。

周囲の人影が私に話しかけていると思われるとき、たいてい「セラスティーア」「ティーア」という単語が出てから言葉が続くので、多分私の名前なんだと思います。

「ティーア」は愛称？

美しい響きの名前ですが、もと日本人的感觉で言うところの大仰な名前のようにも感じられます。文字数が多いし。

他にも多分「おっぱい」もしくは「ごはん」、「おなかすいた」、「おしめ」、「ねむい」、「いいこ」もしくは「かわいい」だろうと思われる単語を覚えました。これもよく出てくるんですよ。

まあ、古今東西赤ちゃんに多く話しかける言葉のパターンは決まっていますからね。その他にも確信はできないけど多分こう言ってるんだろうな〜という単語もあるし、順調に語彙を増やしています。まだまだ発音できませんけどね！

言葉を話そうとすると「あうあう」「あだだ〜」ってなっちゃう。そして微笑ましい感じで見られる。

よく見えてないけどそんな雰囲気がある！

赤ちゃんライフは結構大変です。

何が大変って、すっかりした意識があるのに目ははつきり見えないうし、体も思うように動かないし、周囲の話していることもほぼ意味がわからないし、退屈で死ねるレベル。もう寝ることしかできま

せん。

実際起きているときには転生についてだとか、前世の自分の死後のことだとか、現在の周囲についての考察なんかを、赤ちゃんの未熟な脳みそでぐだぐだと考えているからなのか、すぐに眠くなるので、超寝てる。

前世で妹の子供が出来たときに調べたけど、40%の赤ちゃんは18時間から20時間眠るというから、決して寝過ぎって訳じゃないだろうけど。

たまに、赤ちゃんの頃からこんなにたくさん考えてて大丈夫かな？赤ちゃんは脳細胞がまだ発達していないから考えるということが出来ないって聞いたことがあるような気がするんだけど、脳みそぱーんってならない？って少し心配になるけど、今のところ特に頭が痛くなったりはしていないので、大丈夫だと思おう。思いたい。

今の状況だとそのつもりがなくてもいろいろ考えちゃう。ていうか、思考を止めるとか難しすぎる。

大きくなったら覚えてないし、研究してもわかんないだけで、実は赤ちゃんてみんな生まれてすぐからいろんなこと考えてるのかもしれないし。

そうそう、尾籠な話で申し訳ないんだけど、よく小説であるような転生者の難関、おしめのお世話。

私の場合も意識は大人なんで、人様に下の世話をしてもらうのはやっぱり抵抗ありました。

でもまだ必要箇所の筋肉ができていないのか、我慢するなんて無理でした。まさに垂れ流し！

それで、泣き声あげて人を呼べば換えてもらえるんだけど、最初恥ずかしくて少し泣くのを躊躇してたの。

そしたら布おむつなもんだからだんだんかゆくなってきたちゃって。もちろん赤ちゃんなんて手が届かないからかゆくてもかけない！

おまけにデリケートな赤ちゃんスキンはすぐかぶれちゃう！そうなら拷問過ぎる！と思っておもいきり泣き声をあげましたよ。

恥ずかしかつてもしょうがないよね！だって赤ちゃんなんだもん！みんな一度は通る道さ！

あとは、どうも私が「私」という意識を持つてぱちりと目が覚めたあときにはすでに生まれてから何ヶ月か（なんとなく2、3カ月位って感じ？なんでその時点での覚醒だったのかは全くわからない）経ってたっぽいので、それまでに何度となくおしめ換えは行われただろうから、今更恥ずかしかつてもね…という。

泣き声をあげるといふ行為も意識的に良い大人な私にはちよつと難しいかな？と思ったりしたんだけど（だって、悲しくも何ともないのに大声あげて泣いてくださいと言われても、俳優でもない限り難しいよね？だいぶ思い切りがいると思う）これが精神は肉体に引きずられるという事なのか（ちよつと違う？）かなり簡単に泣ける。不快感を感じたりすると気を抜いたらすぐ泣けちゃう。止まらない。あつという間に大音響ですよ。まあ、これが正しい赤ちゃんの姿だよな。

もうひとつの転生者的問題の、おっぱい飲むのが恥ずかしいって感覚はあんまりなかった。

これって自分が女だからかな？もし、もと男だったら恥ずかしいし、抵抗あつたかもしれない。

飲まなきや衰弱しちゃうししょうがない。合言葉は赤ちゃんなんだもん！でよろしく！

なまぬるいミルクとかちよつと…って思ってたけど、赤ちゃん舌にはとつても美味しかった。おっぱいうまうま。

ただ、少し気になることがあつて、どうも私におっぱいをくれる女性が二人居る。

一人は母親っぽいけど、もう一人はどうやら乳母やさんってやつ

みたいだ。

そして、おしめ換えだの行水だのお着替えだののこまごましたお世話をしてくれる人があと2、3人いるっばい。

使用人がいるの？もしかして今世のおうちってお金持ち???

それに周囲で動く人影のうち、女性と思われる人たちのシルエットがもつさりしている。動くときはわさわさ動く。

何人かが揃った地味目の色合いのもさもさはメイド服？だと思っただけ、母親らしき人影も姉らしき少し小さめの人影も綺麗な色のもさもさを着ている。

どうやらドレスみたいなものを着ていると思われる。

…ドレスって…ドレスを日常的に着る国なんてあつたっけ…??

あとこれは男女関係なく頭のあたりの色がえらくカラフル。

髪の毛？髪の毛なの??

薄い水色とかパステルピンクとかオレンジとかなんですけど…。

染めてる？ウィッグがはやり流行ってるの？まさか地毛じゃないよね？人類に薄い水色の頭髮とかありえないよ…。

なかでも私の家族と思われる人たちの頭の色はかなり派手で、金とか銀とか。

金髪や銀髪は人類的にありえなくはないので、それはいいんだけど、なんか発光してるみたいにキラッキラ！金髪や銀髪ってこんなに光り輝くものなのかしら…。

なんか思いつくことがないではないんだけど…まさかね？違うよね？

第一章 1話目 視界不鮮明（後書き）

しばらく乳幼児期が続きます。

後宮が出てくるのはまだまだもつと先です。

タイトルに偽りあり??話の進み具合によっては途中でタイトル変更するかもです。

第一章 2話目 未知との遭遇（前書き）

お待たせしました。これからも更新頻度は1週間に1度程度になるかと思われます。

ぼちぼち進めていきます…。

第一章 2話目 未知との遭遇

このたびめでたく2歳になりましたセラスティーア・シエリア・デイ・アンフォールです。

フルネームで名乗ってみました！長いね！

実は最近わかったんだけど、私の家ってばお貴族様でした。

王の子供で、臣下に下った者に与えられる爵位の次の爵位らしい。純粋な貴族としては最高位。

これって侯爵って事だよな？立派な上級貴族じゃん！

それまでも、このうちはんばなくお金持ちだなく、てか、うちっというより、これはすでにお屋敷というレベルよね…とは思ってたけど、まさか貴族とは思わなかった。

しかし、残念な事に現代の貴族制度の残っている地球上のどこかの国の貴族って訳じゃないんだよね…。

もしそうなら安心してセレブライフを満喫できるってものだけど、今世で私が生まれたのは前世から見るとまったくの異なる世界。

いわゆる異世界。

しかも、文明は今のところ観察する限り中世ヨーロッパ程度。

まあ、まだお屋敷の中やお庭を散歩する程度の行動範囲内ですが世界を知らないなので、断定はできないけど、字を覚えるために読み聞かせられている本の内容を鑑みても、多分間違っていないと思う。

こちらでは主に使われている紙は羊皮紙っぽいもので、一冊一冊手書きなので、本はとても高価。

子供向けのも本というのも貴族子女に読み聞かせるためのもので、さし絵もほとんど入ってないし、内容は世界の成り立ちの神話とか、昔の英雄の伝説とか、簡単な社会構成の説明（王様がいて、貴族がいて、騎士がいて…みたいなの）。

自分の家が貴族で侯爵だというのもこの本を読んでいる時に説明されて知った」などだ。

これらの本は娯楽のためのものではなく、幼子に無理なく世界を教えていくための教科書のようなものだ。

それで学んだところによると、少なくとも私の今いる国は中世的社会制度で、世界は神様が造って、神様の子孫がはじめの王様。

王権神授説ですね。わかります。

中世ヨーロッパ風の異世界に転生とは、まさに転生トリップのテンプレ！って感じ。

前世での私の好物ですが、まさか実体験することになるうとは…。

ここまででは、それってただ単に地球の中世ヨーロッパに逆行トリップなんじゃない？と思われそうだけど、ここが異世界だということは、かなり早い段階で判明した。

詳しく言うなら目がはつきり見えるようになってすぐ。

何故分かったかというところ、魔法があるんだよね、この世界。

魔法ですよ！魔法！初めて見たときにはかなり興奮しました！

いつもベビーベッドの横で行われる私の沐浴準備中に、私の未知との遭遇たるその魔法は行使されました。

鮮明な視界が嬉しく、いろんなものがめずらしくて、その時もしつくり準備を眺めていたのです。

私の専属メイドであるパステルピンク髪のリリーが絨毯の上に布を何枚か敷き、空の桶を置き、そこにもう一人の専属メイド、薄水色髪のマルタが手をかざしてもにもよ何事かつぶやくとパシヤ

ンという音と共にいきなり桶に水が。

え???と想つて見てみると今度はリリーが水の溜まった桶に手をかざし、同じように何かつぶやくと桶から湯気が!

あつという間に沐浴にピッタリな温度のぬるま湯が桶の中にできあがったのです!

なんとということでしょう!まさか私のすぐ横で日々普通に魔法が使われていたなんて!

桶に何かをそそぐ音なんか聞こえなかったから、てっきりいつもその場で準備してるんじゃないかと、適温にしたお湯をはった桶をえつちらおつちら娘さんが細腕で持つてきてるんだと思つてた!

重労働で大変ですね、毎日すみませんって思つてたよ!

いや、つねづね丁寧にお世話してもらつてありがたいのにはかわりなかつたけど!

今でも私の専属をしてくれているふたりは、何故が大興奮して目をキラキラさせている私に首をかしげながら沐浴させてくれた。

それから魔法らしき現象を見るたびご機嫌な様子に、どうやら魔法を見るのが好きらしいというのがわかつたみたいで、あやすときに水の玉を空中にぶかぶか作つたりなどしてくれるようになったんだよね。

それに、まだ視界がぼんやりしていた頃にもうすうす感じていたけど、この世界の人間の頭髮はとつても色とりどりで、もとの世界の人類では自然発色しないような色をしている。

あと、髪の色がやっぱりパツと目立つけど、目の色もおかしい。金色とかあるんだよ!

魔法を実際に自分の目で見て、ここが異世界であると確信した訳だけど、それまでも周囲の人間の色彩からそうじゃないかと思つてはいたんだよね。魔法はだめ押しって感じかな。

この世界では魔法の属性が髪と目の色に顕われる。

薄水色のマルタは水属性、パステルピンクのリリーは火属性だ。
ファンタジーっばいね！

まだ属性と髪の色に関連性を把握してなかった赤ちゃんの頃には、カラフルな髪の色がすごく不思議で、甘えるふりでメイドさんの髪の色をひっぱってみたい、その際抜けた2、3本の髪を観察してみたり（とても痛がっていました…被害にあった皆様、あのころはごめんなさい…）だっこのときにじっくり根本まで観察してみたりしたなあ。

今はもうそんなもんなだと納得したけど、染めたってこんな綺麗な色にはならないと思えるパステルピンクや薄水色の髪の色が、どう見ても頭皮からじかに生えていてとっても興味深かった。

自分の髪の色を観察したらいいじゃん、と思われるでしょうが、あいにくと私はどうやら地属性。

髪も目も普通に茶色という前世でも良くある普通の色合いなので、観察したってちっとも面白くないのです。つまらん。

地属性に不満はないけど、私ももっと面白い色が良かったなあ…。

しかし、異世界で中世なんて、フィクションとして読む分にはいいけど、実際そこで生きていくとなると不安になるよね。

今のところ読んでもらった本には出ていなかったけど、定番のエルフやドワーフなんて人間以外の種族もいるんだろうか？

こないだ読んでもらった「はじまりのおはなし」という神話の本によると、神様や精霊はいるって事になってる。

ドラゴンやペガサスみたいな幻獣系は出てなかったけど、魔物という生き物はいるらしい。

人間に敵対的な魔族や魔王なんてのもいるのかな？いたら嫌だなあ。

魔族や魔王がいなくても、人間同士が戦争中の群雄割拠の時代もすごく嫌だなあ…。

戦争なんかおきて負けたら、一族郎党死刑とか簡単になりそう。中世の戦争はそのへんがすごくシビアだったはず。

戦争じゃなくても貴族同士の権力争いや、陰謀に巻き込まれて陥れられたりなど、中世貴族生活の災難っていくらでも思い浮かぶわ。庶民生活も大変そうだけど！基本的な人権はまだなさそうだし。

私の周囲の雰囲気はのほほんとしてるけど、いかんせんお屋敷から出たことがないので何とも言えない…。

それに、安全面ももちろん心配だけど、一番の不安はこの世界にはテレビもネットももちろんなく、本が高価ということから、漫画やバラエティ豊かでストーリー性溢れる小説なんてものも期待薄だということ。

活字中毒だった私には生き辛い世界すぎる。

今はまだ見るもの聞くもの珍しくて、日々楽しく暮らせてるけど…。

もうちょっと大きくなってから、もうちょっとこの世界を把握し
てからの話だけど、この点だけはどうにかしなければ…。

第一章 2話目 未知との遭遇（後書き）

全く会話なし…。

暫く主人公が世界に関してぐだぐだ考察したりします。無駄な心配
なんかもしています。

次話では主人公のキラキラ家族が出てくる予定です。

第一章 3話目 姫騎士(前書き)

キラキラ家族そのいち登場です。

第一章 3話目 姫騎士

「ランランラ〜ンランランラ〜ンララララッラララ〜」

今日はお天気がいいのでお庭でピクニックごっこです。

お庭と一口に言っても大貴族のお庭をなめちゃいけません。前庭・主庭・中庭・奥庭と4箇所もあるんです。

私が良く連れ出されるお庭は奥庭にあたり、人工的に作られた小さな丘や池、庭の真ん中を流れる小川などがあり、ちよつと広めの運動公園のようです。

そこへバスケットに詰めたお弁当や敷物を持ってきてお外でお昼ご飯を食べ、池や小川で遊んだりするのです。

同行者は乳母のメリサと、メイドのマルタとリリー、メリサの娘で私と同じ年の乳兄弟アーニヤと、その兄の4歳児クルト、執事の娘で3歳になるリナ、料理長の息子で、お屋敷に住む同年代の子供たちの中では最年長の5歳児ヴァン。

今のところお屋敷には私より年下の子供はいないし、ヴァンの上となると12歳の子になり、その位の年齢の子供はすでにこまごまとしたお屋敷のお手伝いなどして立派に働いているのです。マルタとリリーだって15歳と14歳ですしね。

私の生まれたエルシオーネ王国は基本的に温暖で、季節の移り変わりはあるにはあるがゆるやかで、夏もそこまで気温が高くならず、冬もそんなに寒くはならない、過ごしやすい国です。

今は少しずつ夏に向かいつつある季節で、動き回るとつつすら汗ばむ位のあたたかさ。

外遊び用の簡素な生成りの膝丈ワンピースに素足、幅広のつばのついた帽子という格好の私は現在、浅くゆるやかに流れるピオトー

プのような小川に敷き詰められている石の中から、丸く平べったい
できるだけ白っぽい石を、鼻歌を歌いながらごきげんで集めていま
す。

私の2歳児ぶりっこのお手本であるアーニヤも一緒になって探し
てくれています。クルトとヴァンは少し向こうで水かけあいつこ、
リナは綺麗な色の石を集めているようです。

本日の鼻歌はジ リメドレー。

前世で友人と2人で月一で10時間耐久カラオケをする位カラオ
ケ好きだった私は、以前もそうだったように良い気分の時はついつ
い鼻歌を口ずさんでしまいます。

たまに日本語で歌詞まで歌っている事もあるけど、周囲の人には
幼児がでたらめな言葉を適当なメロディーにのせて歌っているよう
にしか聞こえないので微笑ましく見られています。いずれ歌詞をこ
ちらの言葉に訳してやるうと思えます。

「ごきげんだなティーア。今日のは何の歌だい？」

「リシエねえちゃま！」

ふいにかけられた声に振り向くと、いつの間にか小川のそばに二
人いるうちの上の姉、リシエリーアが立っていた。

女性ながらきりりとした端正な顔立ち、けれど唇は女らしさをあ
らわしてふつくらとつややか。光の属性を宿した髪の毛は、1本1
本が光を放つかのように豪華でキラキラしている。

髪と同色の金の瞳を日光に煌めかせながら立つその姿は、家族
として2年半暮らした今も見るたびに圧倒されてしまう美しさだ。

「おかーりなちゃい！」

ばちやばちやと小川から飛び出た私はそのまま大好きな姉様に抱

きつこうとして、はたと足を止める。

水遊びをしていた私の手やワンピースの裾はびしょ濡れで、このまま抱きつくと姉様の服も濡らしてしまう。

そんな私の躊躇を見抜いた姉様は凜々しく笑うと、両腕を開いて私にさしのべる。

「おかえりの抱擁をしてくれないのかい？大丈夫、この陽気だ、濡れたってすぐ乾く」

「ねーしゃま！」

広げられた腕に今度はためらいなく飛び込む。

リシエ姉様は御年14歳だけど、すでにけしからんプロポーシヨンである。

子供特権で存分に姉様の胸にしがみつく。ぱふぱふ。やらかい。本今朝から遠乗りに出かけていた姉様は乗馬服に身を包んでおり、カッコ良さ倍増だ。

先ほどから形容詞が凜々しいとかカッコ良いとかまるで男性をさせているようだが、決して間違えている訳ではない。

この上の姉は刺繍やレース編みといった多くの貴族子女に好まれる趣味には全く興味がなく、それらは教養の範囲でしか習得していない。男勝りで、乗馬や剣術などが好みの少し型破りなところのある人だ。

貴族の娘は剣になど全く触れることがないのが一般的だ。剣術を習うなんてもつてのほか。

しかし、わが家ではその姉様の行動を許し、剣術の教師もつけている。普通の貴族の家なら許さないと思う。

そうすると型破りなのは姉と言うより両親なのか？

剣の腕前の方もなかなかのもので、社交シーズンになると王都で

頻繁に開催されるパーティーなどにも、そこまで格式張ったものではない限りは男装で参加したりしているらしい。

話し方や立ち居振る舞いも凛々しく「姫騎士」とか呼ばれて下手な殿方よりもお嬢様方に人気なのだとか。

それなんて宝塚？いや、私もカツコイイ美人でナイスバディのお姉様は素敵だと思うけれども。

姉様は幼い頃読んでもらった古の英雄王と王を支えた騎士たちの物語が大好きで、憧れていて、その騎士たちのような生き方を理想としているのだそうだ。

王族の女性の警護に、準貴族である騎士爵階級の子女による女性のみ近衛騎士団があるので、できれば将来はそこに入隊したいらしい。入れないことはないだろうけど、そうなると上級貴族出身初の女性騎士だな…。

しかし、普通はヒロインとして出てくる可憐な姫君とかに憧れなかな？やっぱもともと活発な子供だったのだと思う。

「あのね、いまの、おしゃんぼのうたなの」

「さんぼのうたか！確かになんだかうきうきするメロディだったな！ティーアは音楽の才能があるな」

まぶしい笑顔で私を褒めながら抱き上げる姉様。

すいません、才能があるのは久 譲大先生です…。

「何をしていたんだ？」

「いし、ひろってたの」

私は手に握ったままだった石を姉様に見せる。

姉様は私の手の中にある石を見、ついで小川の横にたくさん積ん

である同じような色と形の石を不思議そうに眺める。

「石を集めてるのか？」

「しようなの」

「これで遊ぶのか…？おままごとにでも使うのかな…？ま、いつか。ティーンア、そろそろお昼寝の時間だから迎えに来たんだよ」

「はい」

姉様は不思議そうな顔をしていたが、幼児のやることだと気にしないことにしたらしい。

マルタとリリーにこの場の片付けをお願いし、私を抱き上げたまま屋敷の建物に向かって歩き出す。

私は遠ざかるマルタとリリーに集めた石も一緒に持ってきて、綺麗に洗っておいて欲しいと頼んだ。

実はもうそろそろやってくる下の姉、シェスティリアの誕生日にプレゼントとして手作りのものをあげようと思いつき、そのための材料を集めていたのだ。

私がお昼寝の時間と言うことは、この場にいた子供たち全員がお昼寝の時間だということだ。

乳母のメリサもアーニヤとクルト、ヴァン呼び集めている。

ヴァンとクルトはもうちょっと遊びたいらしく、お昼寝をしたくないとごねていたがメリサにかなうはずもない。

姉様のやわらかいふかふかの胸にだっこされて運ばれる振動は、私を夢の世界に誘い始めていた。

第一章 3話目 姫騎士（後書き）

家族一人目しか登場させられませんでした。

話が全く進みませんね。

しかし、これからのものつたりとしか進まない予定なんです…。

第一章 4話目 家族の肖像（前書き）

微妙に週一更新に間に合わなかった…

第一章 4話目 家族の肖像

心地よい微睡みのなかからゆっくりと意識が浮上する。

ふかふかのお布団の感触に、もう少しこのまま寝ていたいような気分になるけれど、自分の顔のすぐそばに気配を感じてまぶたを開ける。

途端に視界いっぱい広がるキラキラまぶしい金色と銀色。

エルシオーネ王国アンフォール侯爵家当主であるお父様と、その妻であり、アンフォール侯爵夫人のお母様が至近距離で寝ている私をのぞきこんでいた。

光属性のお父様はリシエ姉様と同じ金髪金目、癒し属性のお母様は銀髪で銀の瞳だ。

色合いも綺麗だが、完璧に左右対称に整った理想的な顔貌も、二人とも神様が鼻肩して創造したとしか思えない美しさ。

…もう慣れたけど、起き抜けのこの煌びやかさは何度経験しても心臓に悪いな…。

目のはつきり見えるようになってすぐの赤ちゃんだったとき、初めてこれ（起き抜けに眩しい超絶美形のどあつぶ）をやられたときは、ひきつけをおこしそうになったよ…。

うちの両親は私の寝顔を眺めるのが大好きだ。

まあ、確かに子供の寝顔って癒されるよね。

延々見てたくなる気持ちはわかるけど、ちよっと至近距離で見すぎだよ、と言いたい。言わないけどさ。

両親に愛されているのをひしひしと感ずるので、決して悪い気分

ではないんだけど、キラキラすぎてびっくりするんだよ…。

周囲を見回すと自分の部屋のベッドの上だった。

そっか、お昼寝してたんだな…。

お昼寝は自室のベッドでメイドさんたちに見守られながらするけど、夜寝る時は両親の寝室と一緒に寝ている。なので、目覚めた時に自室にいればお昼寝していたのだとすぐにわかるのだ。

ちなみにベッドはクイーンサイズ位の大きさ。今は転落防止の柵付きで、成長すれば柵が外される仕様となっている。

子供にクイーンサイズって…と思ったけど、わざわざベビーベッドやキッズベッドを成長と共に用意するより理にかなっているかも。しかし、まだこんな広くて立派な自室ってまだ必要ないよね。

居間と寝室に分かれてるんだよ？

メイドや乳母が控える小部屋もついているんだよ？

2歳児には無駄な気がしてならない。

先祖代々、お屋敷の一族が住む区画にある家族用の部屋だし、その部屋数にもまだまだ余裕がある（一体どれだけ大家族が住むことを想定してこのお屋敷は建てられたんだ。大は小を兼ねるの精神？）ので、日本の狭い一般住宅での子供部屋事情とは違うんだろうけど。

ここがお嫁に行くまではずっと私の部屋になるのだから、侯爵家としては広すぎるって事はないのだろうが、もと一般市民の感覚からすると自室が豪華すぎて落ち着かない気分になる。

これでもだいぶ慣れてきたんだけど…。

「おとーしゃま、おかーしゃま…」

目を擦りながら、起き上がる。

庭からリシエ姉様に抱っこで運ばれてる途中までの記憶はあるん

だけど、そのあとが曖昧だ…。多分部屋に着く前に寝落ちしたんだな。

「やあ、ティーア。よく寝てたね」

多分、執務の途中で抜け出してきただろうお父様が、輝かしい笑顔で頬にキスをしてくる。

「でも、夜眠れなくなるからそろそろ起きましよう?」

お母様も反対側の頬にキス。私も二人におはよう(?)のキスを返す。

もぞもぞとベッドから降りようとする私をお父様が抱き上げる横で、お母様がそばに控えていたりリーとマルタに私の着替えの指示を出す。

このあとお父様は多分執務に戻られるのだろう。

そして、私は夕方まで一日の中で一番楽しみな読み聞かせの時間。昨日まで読んでもらっていた子供向け王国史は終わったから、今日からは違う本になるはず。どんなだろう。楽しみ。

高価な本ではあるけれど、流石は侯爵家、先祖代々集めた本が詰まった立派な書庫があるのを知っている。子供向けの本(教科書)もそこそこある。

字もだいぶ覚えてきたので、早く自分一人で好きなように好きな本が読めるようになりたいな。

バリエーションに期待は持てないけど、とりあえずこの世界の普通の子供が読んだら教科書にしかない退屈なだけの歴史の本も、私にしてみればファンタジー小説と変わらないので、結構楽しく読めるのは僥倖だ。

ファンタジーばかりは飽きるけどね!しょうがない!

私の今世での家族は、お父様とお母様、兄弟の一番上の16歳になる長兄のヴァロール兄様、長女のリシェリアーナ姉様に次女のシエステイリア姉様、そして私。

父方と母方、両方のお祖父様とお祖母様も王都でご健在だ。

この世界では結婚年齢が早いので、お祖父様お祖母様と言ってもまだ50代。

一般庶民の平均寿命は大体60歳位（それでも地球の中世の平均寿命は40代なのだから優秀な方だと思う）だが、王侯貴族は魔法の癒しなどの恩恵をふんだんに受けられるので、現代日本の平均寿命位はあるんだよね。

現在兄様は父方のお祖父様お祖母様と共に王都のタウンハウスに住んでいる。

なんと“王太子様のご学友”をしているのだ。

基本、貴族の子供はそれぞれの領地で家庭教師などを雇い勉強するのだが、王太子様と年齢も近く（兄様の方が一歳上）、親族でもある兄様は、将来の王を支える人材の一人として期待されていて、王宮で王太子様と共に最高の教育を受けている。

そう、王太子様と親族なんである。続柄は従兄弟。

実はうちのお母様は元エルシオーネ王国王女で、エルシオーネの宝玉と讃えられた姫君だったそうだ。

今の王様の妹にあたり、社交シーズンに王都の舞踏会に参加したお父様に一目惚れ。お母様の猛アタックで二人は結ばれたらしい。

今でも王宮の語りぐさになっているんだって。

そういう訳で王都にいる母方の祖父母とは元王様と元王妃様。現

在は王都から少し離れた風光明媚な場所にあるこじんまりとした離宮で優雅に隠居生活を決め込んでいる。

兄様が領地に帰ってくるのは大体年に2回くらいの頻度。

私が生まれた時にはすでに王都暮らしだった兄様は、それでも私をとても可愛がってくれていて、私が生まれる前は一度の帰省の滞在期間は2週間ほどだったとか。それが現在では1ヶ月程度滞在していく。

お兄様はお父様そっくりの容姿なんだけど、属性は火の属性で、燃えるような紅い髪と紅い瞳が16歳ながら精悍さを醸し出している。金や銀も綺麗だけど、紅い色もとってもゴージャスなイメージ。属性はある程度遺伝によると考えられていて、兄様の属性は元王妃様である母方のお祖母様ゆずり。

末の孫に会うために何度かこのお屋敷を訪れてくれているお祖母様も美しい目の覚めるような赤毛だった。こちらでは歳をとったからといって髪の色が褪せたり白髪になったりはしないっばい。

ついでに言うと、お祖父様は王家の伝統的な属性である光属性。お母様の癒し属性はお祖父様のお母様、私からすると母方の曾お祖母様からの遺伝なんだって。

リシエ姉様は属性も容姿も完全にお父様似。

逆にシエス姉様はお母様にそっくり。儂げで優しい美貌の癒し属性。

でも、性格は実はリシエ姉様がお母様似でシエス姉様がお父様似なんだよね。兄様はお母様寄りかなあ。

楚々とした容姿に騙されるけど、お母様はお父様ゲットエピソードからも伺えるように、かなり男前な性格をしているし、お父様は

凛々しい美丈夫だけど、柔和で穏やかな性格をしている。

お父様については優しいばかりでは領地は治められないから、家族には見せない面も持っているのだからうけど…。

とにかく私の家族は総じてみな美しく綺羅綺羅しい。

容姿の事ばかり言っているようだが、私が知る範囲において性格も良い方なのではないかと思う。

前世での私の家族は、ごくごく普通の日本人で、黒髪に黒目、顔立ちだつて十人並み。

両親は共働きで私と弟、妹の三人兄弟を愛情を持ってしっかり育て、全員大学まで行かせてくれ、常識を持った大人に育て上げてくれた尊敬できる両親だけど、そこはそれ。平凡を絵に描いたようなそのへんにいるおじちゃんおばちゃんだった。

弟はそろそろ頭髪がやばくなり始めたサラリーマンだったし、妹は化粧で化けるおしゃれさんではあるがやっぱり普通の主婦。

なので、初めはこの美々しい家族にとつても違和感がありました。こんなお父ちゃんお母ちゃんや兄弟という生き物と違う！というね…。

現在の家族全員、私を心から愛してくれているというのはとても良くわかるので、今ではやはりこの人たちも自分の家族なんだと実感できてはいるけど。

さて、翻つて現在のこの私、セラスティアを客観的に分析しよう。

属性は地属性。髪も瞳も濃い茶色、チョコレートブラウンって感

じかな？

顔立ち自体はやはりあの両親の子供だけあってパーツパーツは整っており、美形と言って問題ないだろう。

ぱっちりとした二重の大きな瞳、小作りな鼻、形良い輪郭。ふっくらとした唇はバラ色で、頬も健康的に色づいている。

日々メイドさんにバッチリお手入れされている髪はツヤツヤで、ふわふわナチュラルなウェーブを描いている。

身体は2歳児なのでまだまだふっくらしているが、肌は白く、部位ごとの形も良く、バランスがとれている。

単体で見ると、かなりの美少女ぶりだと思ふのよね。現代日本なら子役デビューからスターダムまで一直線でいけそうな。

しかし、いかんせん他の家族たちが美しすぎ、色彩が派手派手すぎる。

並んでみると、私一人だけ地味すぎるのだ。

チヨコレートブラウンって要は焦げ茶色って事だからね…。

これってみにくいあひるの子状態だよね…。

みにくいあひるの子だって、本来の白鳥の子ばかりのなかにいれば地味な色合いが目立たず、かわいい白鳥の子だと思ふんだ。そんな感じ。

どうやらセラスティアである私は、地属性だった父方の曾お祖母様に似ているらしい。

私としては前世の黒髪黒目の自分と色合いが似ているので落ち着くし、断然以前の自分よりも美しく先が楽しみな美少女だし、地属性って私的には一番使い勝手が良さそうだしで大満足なんだけど。

どうも貴族的には地属性はあんまり…らしいんだよね。

庶民的には一番喜ばれる属性なんだけど。
街生まれでも職人として大成しやすいし、農村生まれなら作物の
出来に直結するんだから当然だよな。

属性は遺伝によると考えられているとは先に語った通りなんだけ
ど、一般庶民ももちろん属性をもっている。

でもその力は貴族に比べて少ない事がほとんど。

力の強さは色彩の濃度に現れる。濃い色を持っているものほど力
が強いというとてもわかりやすい法則。

なので、貴族でない人たちは濃度の違いはあれ、みんな白っぽい
薄い色彩をしている。

力を持つものが権力を握り王侯貴族となり、またその貴族同士が
婚姻してきた結果なのだろう。

たまにいきなり濃い色彩を持つ人物が農村部や街中の普通の家庭
に生まれたりする事があるのだが、そんな時は神の加護の強い子供
として、その地の領主である貴族の家に養子待遇で丁重に迎えられ
たりするので、ますます一般庶民には濃い色は現れがたくなる。

ちなみに、突発的に力の濃い子供が生まれたりする事については、
家系のどこかで貴族の血が混じっている先祖返り説と、突然変異説
があり、先祖返り説の方がやや優勢。

しかし、昨今ではそんな感じで地属性の子供が生まれても貴族の
家には迎えられないこともしばしばだとか。もちろん、力の強い地
属性の子供は実家で大切に育てられるので、そっちの方が子供にと

つては幸せかもしれない。

養子待遇だの丁重だの迎え入れるだの綺麗に言葉をつくろつても、結局は権力の取り込みの一環だ。

子供を渡す家族だつて大概は領主様に言われて泣く泣く手放すというのが本当のところ。

私はまだ屋敷の敷地から出たことがないけど、お屋敷の使用人の中には庶民の方々も当然いる。

私のごく周囲に仕えてくれているメイドさんや乳母やさん、執事さんや護衛さんは実は領地持ちでない下級貴族の人たちだったりする（メイドさんなんかは、上級貴族の家で行儀見習いの一環として働き、働きぶりにより、人柄に太鼓判を押されると紹介状をもらったり、時にはじかに紹介されたりしてお嫁に行く。たまに同じ下級貴族出身である、お屋敷で働いている男性と結婚したりする。実はこのお屋敷は出会いの場のひとつなのだ）ので、みんなそれなりに鮮やかな色彩だが、たまに厨房近くで見かける人の色は確かにあわくいピンクだったりして、それはそれでとってもキュート。おっさんだつたけど！

地属性が貴族的にあれな理由としては、色も地味だし、泥臭い感じがするし、地属性は植物の成長を早めたり、操ったり、土壌を豊かにしたり、土や石や地面を操って簡単に色々造ったりできるんだけど、そういうのは農民や職人の仕事であつて貴族の仕事ではないんですつて。

石が操れるつて事は鉱物とか加工できたりするつて事だよ?! 宝石の原石からあつというまに美しい宝石ができちゃうんだよ?

私は超チート属性じゃん! つて思うんだけどな。

そういう鉱石を加工したりなんてのも貴族はしなくて、加工された物を購入するのが貴族なんだつてさ。

昔まだこの国が出来たてで、温暖な気候に広大な平野という農業に向いた土地でありながら、その平野は見渡す限り固い地面だった。まずは耕すところから始めなければならなかったその時代、地属性の人々はその真価を発揮し、農地を耕し、地を肥えさせ、道を整備し、鋤山を発掘し、鋤石を加工しと大活躍。

建国の大きな力となり、「豊穡の属性」として尊重されたそうなので、だからこの国の古い家系の貴族にはもともと地属性の血筋が多かった。

しかし、時代は移り変わり、広大なただの平野が広大な耕作地に変わり、農業国として安定している今、貴族が自ら農作物を育てる事はなく、何かを造り上げることはない。

貴族の仕事は領民の皆さんが頑張って作り上げた作物などを税として徴収し、流通させ、流通を管理し、あがった売り上げで領地を維持管理する事になった。

そうなってくるとカラフルで美しい豊かな色彩を自らにもたらししてくれる属性がもてはやされ始めた。

もともとこの国を建国した王の一族の属性が光属性だった事と、やはり輝く美しい色合いから光属性の貴族は婿にお嫁にとひっぱりだこで、その他にも希少属性で銀の癒し属性、ゴージャスな紅の火属性なんかも人気だ。

そうこうしているうちに貴族の地属性はむしろめずらしいものになってしまった。

「いや、なんだかな、気持ちにはわからないでもないけど、ミ
ーハーすぎるだろ…」

これらの事実はキラキラ家族の中に一人だけ生まれた地味な私を憂いた周囲の人々が、私に理解できないと思っていたり、寝ている

と知っているそばで、私の将来を心配しながら（主に嫁の貰い手。その心配はまだ早すぎじゃね？）語っている事からわかった事である。

わかんないと思って話してるんだろうけど、実はヒアリングはかなり出来るようになってるんだよね…。

発音はまだ難しかったり、単語の選び方がわからなかったりで、喋るとぶりっこするまでもなく舌っ足らずな2歳児相当の喋り方になってしまうので、演技っぽくならず私としては助かっている。

しかし、まあ、それってこの国は豊かで平和だっという事だよな。いいことだ。

私は別にもてはやされなくたって全然いいしね…。

むしろ地味にのんびり生きたいから好都合。

心配してくれてるみんな、ごめんよう。

第一章 4話目 家族の肖像（後書き）

うーん、あらすじとタイトルを変えた方がいい気がしてきました。

一応書いておきたかった設定部分も大体書けたので、残りの設定はちらほらお話の中にちりばめる程度にしてストーリーを進めていくようにします。

第一章 5話目 道は遙か遠く(前書き)

もう、これからは月曜日位に更新、とファジーにいくことにします。
超繁忙期です。
師走ですわ。

第一章 5話目 道は遙か遠く

まず用意するのは洗濯などに使う大きなたらい。

それに5mm程水を張って、布を染める時に使う赤い花をつぶして溶かし、奥庭の小川で拾ってきた、直径3cm程の丸く平べったい白い石を128個並べます。

そのまま3日間放置したのち取り出して乾かし、仕上げにもう一回綺麗に洗って乾いた布でみがきます。

すると片面がピンク色（布を染める時ほど紅くは染まらなかった）で、片面が白い2色の石が出来上がるので、小袋2つに64個づつ分けて入れます。

次に50cm四方の大きさの何かの動物の皮をなめした丈夫な布を貰ってきます。

この世界にあるチェスに良く似た紳士の嗜みのボードゲーム、シヤトラ（軍駒とも呼ばれます）の盤面をお父様の書斎から借りてきます。

40cm程の正方形が8×8に線で分割されているシヤトラの盤面を布に写し取り、線の部分をメリサに刺繍してもらいます。自分でしたかったので、まだ針を持たせてもらえませんが。

布の端っこがほつれないようにかがり縫いもしてくれ、ついでにワンポイントにお花の刺繍もしてくれました！濃い茶色のなめらかな皮布にアツシユグレイの糸で、シックでお洒落な感じに仕上がりました！

小袋の口をリボンで結んで、革布もくるくる巻いてワイン色の組紐で結んで、出来上がりです！

「メリサ、ありあと〜」

大満足な出来映えに満面の笑みの私に、メリサもにつこりと笑いかけてくれるが、刺繍糸や縫い針を片付けながら、不思議そうな表情になる。

「それにしてもお嬢様、おっしゃった通りに作りましたが、それは一体何なんです？」

「え〜とね…う〜んと…」

言葉で説明するのは難しいなあ。目の前でやってみせれば一発なんだけど…。

しかし、これはプレゼント。

たくさん手伝ってくれたメリサには悪いけど、出来れば贈る相手であるシエス姉様に手渡してから、これはこうやって遊ぶんだよ！と種明かししたい。

3日後に迫る次姉シエステイリアの誕生日プレゼントに何か手作りのものを贈ろう！と思いたったのは今から約3週間前。

何を作るのかな〜と考えながらの奥庭の小川での水遊び中に、水底に敷き詰められた石を見てピンときた。

「そうだ！オセロを作ろう！」

もともと大きさの揃った、踏んでも痛くないように平たくて角の取れた丸い石を選んで敷いてあったので、その中から白っぽい色をしたものを見つけるのはそんなに大変でもなかったが、出来れば色の感じも揃えたかったし、何しろ2歳半の子供の手ではいっぺんにたくさんは持てない。

128個集めるのには小川に3回は通わなければならなかった。

そんなこんなで出来上がった手作りオセロ。駒を入れる袋の作成

や盤面になる皮布への刺繍など、重要な部分の半分はメリサにやつてもらったので、「私の手作り！」と胸を張っては言えないけど。

「姉様にあげてから、どうやってあしよぶかおしえるね！そしたらメリサもいつちよにあしよぼう！」

「まあ、遊ぶものなんですか？」

「シャトラみたいだけど、シャトラよりかんたんなの」

それは楽しみです、と微笑みながらメリサがお茶の支度を始める。

この世界ではまだまだ“娯楽”というものの幅が少ない。

男性貴族の間では娯楽といえば狩りや、前述のチェスに良く似た「シャトラ」というボードゲームや、木彫りの札を使ったポーカーのようなゲーム。

庶民の男性は、サイコロのようなものはこの世界にもあるので、それでチンチロリンのような賭け事を行っているみたい。

あとは双方ともお酒を飲んで語ったりする。

独身の場合は花街に繰り出したりするのも娯楽のうちに入るのだろうか？

片や女性がする暇つぶしや娯楽といえば、貴族女性の場合はお茶会をしてひたすらお洒落などに関してのおしゃべりか、刺繍やレース編み、詩作くらい。

シャトラや木札のゲームは女性がするものではないという風潮。もちろん刺繍やレース編みを男性はしない。

庶民の女性ならばやっぱりおしゃべり。刺繍やレース編みもするけど、それは売り物にしたりするものなので内職のようなものだ。

男女共通するものといえば、旅回りで祭の時などにやってくる楽団や劇団や吟遊詩人などの歌や劇（モチーフは過去の偉人の英雄譚）や音楽、踊りを楽しむ事くらいかな？（貴族の場合は領地にやってきた評判の楽団などを館に呼んで楽しむ）

絵画や彫刻などは貴族の屋敷や街の建築のそこそこに、元の世界の現代なら美術館に収められていてもおかしくないような素晴らしいものが溢れてるのだけど、それを芸術として鑑賞するという感じではないし、絵を描く貴族はいない。

それらは建築に関わる職人が建物を飾るために制作するものだからだ。

もちろん美しい彫刻や絵画で自らの家を飾りたいので、腕のある職人は人気があるが、芸術家という概念はいまはまだないようだ。

子供たちは男の子なら冒険ごっこやかけっこやちゃんばらごっこをして遊ぶし、女の子なら木の葉っぱや木の実を使ったおままごと。おもちゃなんてものもほとんどない。

貴族なら、女の子はお人形や、おままごと用の小さなティーセット、男の子は積み木や木馬なんかを持っているけど、私が知る限りおもちゃと言えるものはそれくらいだろう。

この国は中央から海にかけての平地に肥沃な農地が広がり、ところどころに広い森がある、気候温暖で地の恵み豊かな農業国だ。

北から東に険しい山脈が広がり、南側は大海、西側は幅の広い河が通っていて、隣国と土地が直に接している部分がない、立地に恵まれた国でもある。

その攻めにくい地形のおかげで、兵力では周辺諸国に劣るが、ここ数百年は戦争らしい戦争を経験していない。

平和な国で、民が飢えるということとはめったになく、のほほんとした平和ぼけした国民性で、内乱とも縁がない。

唯一攻めてくる可能性（立地的に）のある国に、河を挟んでの隣国となる大陸の半分を占めるキオリク帝国がある。

今は落ち着いているが侵略主義の大国で、本来はいくら広大な河を間にしているといえども気を抜けないはずの国なんだけど、大陸のほとんどの国が動乱のさなかにあつた群雄割拠の戦国時代、後の帝国第一代皇帝となる人物に、彼が小国の王子だつた頃から援助をしていた（どうやら当時の国王の友人だつたらしい）関係で、代々強固な同盟を結んでおり、良好な関係を築いている。

代々の皇帝の後宮に王家ゆかりの姫を側妃として嫁がせていて、歴代のなかには後の皇帝を産み正妃となつた姫もいるみたい。

我が国生産の食料の輸出先はほぼ帝国。一番のお得意様となっている。

だいぶ相場より安い金額での不平等貿易だが、そのおかげでもはや侵略する必要なしとみなされている。

いまやほぼ属国状態というか、周辺諸国には「帝国の食料庫」と影で言われていたりするんだけども。

さて、私の今世での野望は、あまり目立たないようにしつつ、この世界に“娯楽”や“趣味”という概念を増やすこと。

そして“物語”を広め、バリエーション豊かな、まだ私の読んだことのないたくさん“物語”を読むことが出来るようになること。

こんな平和が続くこの国で、そろそろカルチャー的な何かが芽生えても良い頃だと思ふんだ。

もうしばらくしてお屋敷の図書室入室の許可が貰えて、めぼしい本を読み尽くしたら、そこから着想を得ました、みたいにしているいろいろなパターンの“物語”を広めていき、紙を普及させて活版印刷までもってって…。

それまでにぼちぼちと、知る限りかつ再現できる範囲でゲームや遊びも広めていって…。

ああ、識字率もあげなきゃだけど、どうすりゃいいのか…。

出来るかどうかかわからないけど、今2歳半だから、とりあえず20年目標に頑張ってみよう。

20年あれば、漫画なら「赤 鈴之助」が大人気だったのが「キヤ デイ・キン デイ」ブームに、小説なら三島由 夫の「金閣寺」から、村 龍の「限りなく 明に近いブルー」になるんだよ！

20年あればなんとかなるはず！

どんなレベルかはわからないけど、新しい物語が読めるようになるはず！

しかし、目立たないように達成できる目標なのだろうか…。

そもそも達成できるのかもあやしい…。

先は長いなあ…。

第一章 5話目 道は遙か遠く(後書き)

来週も少し更新が遅れるかもしれませんが。
今週と来週を乗り切れば、あとは年末…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4288y/>

異世界の後宮で勝ち組を目指す話

2011年12月13日02時01分発行